

# 動き出したコグニティブの時代



PROVISION 90号 コンテンツ・リーダー

日本アイ・ビー・エム株式会社  
東京基礎研究所  
ストラテジー・マネージャー

高橋 志津 Shizu Takahashi

2014年10月に発行されたPROVISION83号では、「コグニティブ・コンピューティングが拓く未来」と題し、コグニティブ・テクノロジーや、それが持つ可能性についてお伝えしました。あれから2年。果たしてどんな未来、いや“今”が拓かれつつあるのでしょうか。

振り返ればこの2年の間に、AI (Artificial Intelligence: 人工知能) やロボットが大きな期待のもとに熱狂的な盛り上がりを見せ、気がつく周囲にはAIが氾濫しています。予想を上回る勢いで、自然言語、音声、画像といった非構造化データは着実に増え続けています。総データのうち80%を占めると言われるこれらの非構造化データは、技術的な理由などからこれまであまり活用されてきませんでした。また、企業のデータの80%は活用されないダークデータとして蓄積されているという調査結果もでてきます。

使われていないデータを活用することで、これ

までにはなかった知見を導き出すことの重要性が叫ばれてから、まだ長くはありません。しかし、コンピューターの性能の向上と機械学習技術の進歩によって、こうしたデータが学習データとして利用可能になるなど、活用する環境が劇的に変化したことが、最近のAIブームに拍車をかけているといっても過言ではないでしょう。

AIと比較される研究分野が、「IA (Intelligent Augmentation)」です。Intelligent Amplifierと表現されることも多いようですが、IBMではIntelligent Augmentationと言っています。IAは、人の知能や能力を増幅・拡張するのにコンピューターがどのように貢献できるのかを追究する分野です。IBMがコグニティブ・コンピューティングを提唱した時から一貫して追究しているのが、「人を支援・補助」するIAです。

AIを悪とする説が一部にあります。AIとIAのどちらが優れているか、どちらを選択すべきかと



いう議論もあります。果たしてAIは本当に悪であり、AIとIAのどちらかを選択しなくてはならないものなのでしょうか？ 人と知識や感覚を共有できるようになってきたという観点からすれば、「AIの技術を使いながらIAも進化をしていく」という補完関係にあるように思えます。コグニティブ・システムの発展において「大規模なデータからの学習」は不可欠です。この点はAIと共通するところであり、コグニティブ・システムとAIの進化が少なからず同調し、コグニティブの時代を牽引しているのは、ごく自然なことなのかもしれません。

コンピューター技術の発展は、人の生活や働く環境、求める豊かさに大きな影響を与えてきました。人が求める理想が、技術の発展を牽引してきたとも言えるでしょう。来たるべき「未来」を想像の域の中で共有し、ある意味扇動していくことは、期待と需要を喚起するという観点において必

要かもしれません。一方、技術的観点においてきちんと現状を把握し、理想とのギャップを理解しながら着実に歩を進めていくこともまた重要です。

IBMは、コグニティブ・ビジネスを推進することを明確に打ち出し、そのためのソリューションやシステムの革新に、テクノロジーの進化も含めて取り組んでいます。ある種の熱狂とは別の次元で、コグニティブ・テクノロジーが実社会に、実ビジネスにどのように貢献できるのかを、この2年間お客様と一緒に検証してきたように思います。

コグニティブ・システムが皆様の生活を自然に支える——そんな世界への歩みは着実に進んでいます。PROVISION90号では、IBMが技術の現在を理解し、かつ将来の可能性を視野にいれながら、どのようにコグニティブ・ソリューションを生み出してきたか。また、コグニティブ・ビジネスをお客様とともにどのように進めてきたのかを、事例を通じてお届けします。